

新天力助

発行所 新日本医師協会

〒171-0021 東京都豊島区西池袋 1-10-2 日高ビル 4 F

TEL 03-3988-8387 FAX 03-3983-616

振替 00170-9-180753

<http://shinikyo.com/>

メール : honbu@shinikyo.com

本協会は、国民の生命と健康を守り、国民本位の医学・保健・医療・福祉の進歩をめざす。

結論から言えば現状は憲法に保障された基本的人権（命・暮らし・生業）の擁護と保障から見た「人の復興」と言う面では全く不十分な状況にあり、改めて早急な対応の強化が求められています。大規模な生産拠点の復興のみを取り上げて「仕上げの時期にある」などとは到底言えません。また宮城県村井知事のように民間資本の

東日本大震災から9年が経過し、節目の10年に向けてあと1年となりました。改めて私が勤務しているクリニックがある宮城県の復興の現状を振り返り、新医協としての今後の取り組みの方向を考えたいと思います。

激な人口減少が進んでいます。主要産業である水産加工業が震災の影響で販路を失い、その結果就業者の働く場が失われ、町を去る結果になつて人口が減少し、町全体の購買力の低下に拍車がかかつて悪循環に陥る状況になつています。今後、町そのものが消失する

導入と公的資産の安価な売却（いわゆる民活）を以て「創造的復興」を成し遂げようとするなどはもってのほか、とすべきでしょう。具体的な課題については震災以来、県民の立場で復興支援を行ってきた東日本大震災復旧・復興支援みやぎ県民センター発行資料から見たいと思います。

地域の力に依拠しつつ 公的責任による真の 「人の復興」を —東日本大震災から9年目の 3・11を迎えて—

～今田新医協会長より～

懸念すらあります

第43回日本アカデミー

ひとこと

懸念すらあります。震災後9年経つても仮設住宅が解消されていません。一方、災害公営住宅建設には当初の見込みを大幅に上回って8年もかかりました。これによって被災者が住み慣れた地域での公営住宅の入居を諦め他の地域に転居することになります。その結果人口減少を促進させたと考えられています。

建設された災害公営住宅に入居した被災者は、住み慣れた地域で全く違った、新たなコミュニティづくりに直面しています。このことは特に高齢者にとっては困難な場合が多く、結果的に引きこもり状態になる被災者が増えていきます。宮城民医連の調査では入居者の実に40%が「日常的な付き合いがない」と答えています。増え続ける孤独死の要因の一つになっています。

こうした中で被災者は「健康問題」「10年目以降に上昇する見込みの家賃」「必要な収入の確保」の3つの深刻な問題に悩まされています。いずれの問題も国自治体の支援なしには解決困難なものであり、改めて法律に基づく「被災者生活再建支援制度」の抜本的改革と充実が必要です。

その他、災害擁護資金貸付金の返済問題、被災した住居の修理・修繕ができないまま住み続けている「在宅被災者問題」などがあり、

第43回日本アカデミー賞の授賞式が6日行われ、『新聞記者』が作品賞、『新聞記者』が主演女優、主演男優の3部門で最優秀賞を受賞した。東京新聞の望月記者の著書『新聞記者』がモデルとなつて、最近の日本映画ではまれな政権を批判する内容だ。公開前はテレビの宣伝も思うようにできず、大手配給でもない中で『新聞記者』に栄誉を与えたのは日本アカデミー賞の良識である。

それまで日本アカデミー賞は「大手映画会社の持ち回りで賞を取らせている」過去には『永遠の0』がアカデミー賞を獲得など、批判的意見があつた。しかし今回、の受賞は日本アカデミー賞の「公平」をあらわしたようだ。

権力の横暴を鮮明に描き、大学新設の極秘情報の真相を暴こうと勇気を奮つて力いっぱい闘う新聞記者と若き官僚の葛藤を見事に表現している。主演女優のシム・ウンギョさんが授賞式で流した涙は多くの人々に感動を与えた。そうして中で一部から「反日ねつ造記者をモデルにした作品が受賞」「日本アカデミー賞なのになぜ韓国人女優か」等の罵詈雑言が出ていた。こうした悪罵も権力を斬る社会派サスペンスには無力である。今年のアカデミー賞では韓国映画『バラサイト 半地下の家族』が外国映画では史上初の作品賞を受賞、世界中で絶賛されている。皆様ぜひこの機会に映画をご覧ください。(NH)

問題は水、解決はAMAMIIZU

依頼原稿

バングラデシュ沿岸地域では、ほとんどの農村が日本では当たり前の水道というものはない。村の女性や子供たちは毎日1時間近くかけて水汲みに出かけなければならぬ。しかし、その水源である池は病原性の大腸菌や原虫などの微生物で汚染されており、それらが引き起こす下痢によって毎年45000人の幼児が死亡している。問題はそれだけではない。病原微生物で汚染された池や川の水の代替水源策として掘削されてきた860万本の井戸のうち140万本が同国の大気汚染の影響がほとんどなく天水活用に向いた地域である。屋根から集めた天水だけでは生活用水のすべてを賄えないが、飲み水だけなら1日1人3lもあれば間に合うので、飲み水としての天水活用は質的にも量的にも理にかなっている。

バングラデシュの農村部では、各戸でモトカという甕に天水を溜め飲み水として利用してきた歴史がある。モトカは安価なので低所得者層にも購入できたが、貯留容量が最大でも1000l程度なので乾季の飲み水をカバーするには容量が小さすぎた。しかも材質が素焼であるため割れやすいという弱点があった。そこで私はタイの農村において昔から雨水貯留槽として使われてきたモルタル製のジャンボなモトカを開発した。容量は1000lである。私は、雨を単なる

天水(あまみず)の有効活用を考えた。本來雨は蒸留水のようなもので、ヒ素や塩分をほとんど含まず糞便由来の病原菌汚染の機会が少ない安全な水源である。雨水は、生活排水や工場廃水、農業排水及び下水処理水などに含まれる様々な化学物質で汚染された下流の河川水に比べればはるかに清浄な水源といえるだろう。バングラデシュには年間2000mmを超える降水があり、沿岸部は大都市ダッカの

ような大気汚染の影響がほとんどなく天水活用に向いた地域である。屋根から集めた天水だけでは生活用水のすべてを賄えないが、飲み水だけなら1日1人3lもあれば間に合うので、飲み水としての天水活用は質的にも量的にも理にかなっている。

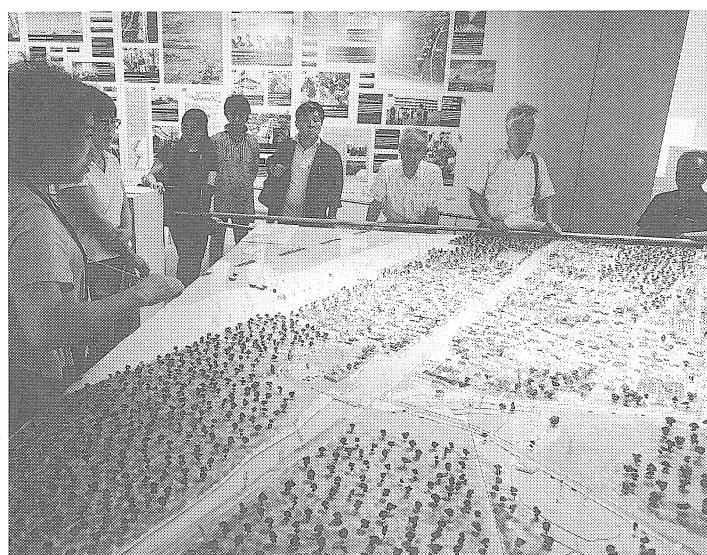
東日本大震災の教訓が全く生かされていないと感じました。私は忘れない光景があります。東日本大震災から1年半が経過した時に訪れた七ヶ浜町の光景です。津波で壊された町営住宅の瓦礫の処理がまだ終わっていないその場所にぽつんと一つ、新しい建物が立ち、玄関先に灯りがともっていました。近づいてみると歯科医院です。しかも診療しています。がらんとした中に一つの灯り、地域の復興を強く予感させる光景でした。地域にはWさんやこの歯科医院のように大きな力があります。それを信じて頑張っています。こうではありませんか。

（1面からのつづき）

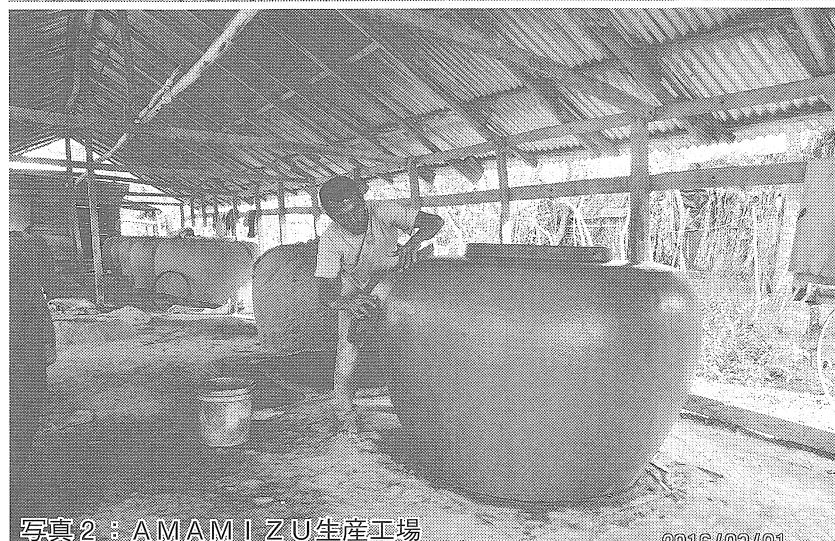
ですが、いずれの問題も深刻さの割合には対策と対応が遅れており、解決に向けた国の制度改定が求められています。新医協としても被災各県の復興支援県民センターと協同して被災者の要求実現のために奮闘しましょう。また被災者生還再建支援法の改定など、必要な法整備と制度の充実を目標に、国に対しての取り組みを強めましょう。新医協は、2020年には福島で研究集会を開催する予定です。福島県民の皆さんと震災復

興・放射能被害について検討議論する場として重視して取り組みましょう。（昨年2019年の東日本台風・台風19号で大きな水害を被った宮城県丸森町）へ行って支援活動をしてきました」との過日、外来患者のWさんから「丸森さんは若年性認知症を患つてから頬まわ仕事をする傍ら、「受けた支援のお返し」と言つて折を見て全国の地震や台風、水害による被災地域に赴き、奥様と共に避難所や仮設住宅・被災住居の修理という支援活動を3年前から行つてきました。そのWさん言うには「全く復旧は進んでいません。とにかく大変でした」。

（新医協会長／宮城厚生協会坂総合クリニック／宮城県認知症疾患医療センター長 今田隆一）



2016年9月に東北研究集会を開催。「せんだい3・11メモリアル交流館（震災被害や復旧・復興の状況などを伝える常設展示と、東部沿岸地域の暮らし・記憶など様々な視点から震災を伝える拠点）にて



モノではなく天からの恵みと捉え、雨に感謝し雨を活かす暮らしと文化を世界に広めたいという思いを込めて、この甕をAMAMI ZUと命名した。AMAMI ZUシステムはいたってシンプルである。トタンの屋根に降った雨は桶で集めて甕に導くが、堅桶の先にはフレキシブルエルボが取付けられており、エルボをタンクの流入口の内外に動かすことによつてきれいな雨だけを集水するようになっている。蓋中央に設置された流入パイプの先は、漏斗状にカットされ金網でカバーしてある。これで屋根に溜った木の葉やちりなどを雨で流し落とすとともに、マラリアや Dengue熱のベクターである蚊の侵入を防止する。貯留雨水の取水はAMAMI ZUに取付けられた蛇口から行う。なお、AMAMI ZUは水需要に応じて連結することができる(写真1)。

バンガラデシュでは、これまで数多くのNGOが国際協力機関や国際支援団体の資金援助(ドネーション)によって雨水タンクを設置してきた歴史がある。しかし、ドネーションが続くのはせいぜい3年であり、しかもそこにはタンク設置後のモニタリングやアフターケアの経費が

私は、その実施に先立ち、2011年にJICAと協働して沿岸地域における村人を対象にした天水活用ソーシャルビジネスに関するベースライン調査を実施した。結果は興味深いものだった。約5割の人

答する一方で、医療費(水が原因で病気になり医療機関にかかるコスト)に1425タカ、水の購入費など(水の購入や汲み依頼のコスト)に1416タカ、年間平均で合計約2841タカかけていたことが明らかになつたのである。このことは、村人たちの参加のもとAMAMI ZUが普及していくは彼ら自身の手で飲み水の危機が解決していくことにつながるだけではなく水コストも削減できるといふ社会革新を意味していた。

私は、このベースライン調査の結果を踏まえ、2012年にはAMAMI ZUの販売を始めた。AMAMI ZU効果が実証されつつある(写真2)。

AMAMI ZUを設置した村人たちからは、「水くみが大幅に軽減された」「下痢が治まった」といった声がSBLに届いており、2013年に現地法人Skywater Bangladesh Ltd(SBL)を設立し、AMAMI ZUのソーシャルプロジェクトを開始した。以来、2019年末までに沿岸部を中心に設置されたAMAMI ZUは約3800基に達した。AMAMI ZUソーシャルプロジェクトは緒についたばかりである。このビジネスモデルがバンガラデシュ全土に広がれば、村人たちが自らの手で飲み水の問題を持続可能な解決していく道筋が開けるだけではなく、人、モノ、金が地域のなかで回転し、その輪が大きくなればなるほど地域経済の活性化にもつながっていくだろう。そのことは、天水の有効活用ビジネスが地域の産業として実を結ぶことにほかならない。

(株式会社天水研究所代表取締役
元墨田区職員 村瀬 誠)

保健所職員であつた80年代初頭、頻発する洪水に対応し「流せば洪水、貯めれば資源」の結論から雨水利用に関連する事業に携わった。

新医協薬学領域部会

4月定例会

日時：4月4日（土）／場所：新医協事務所

テーマ：書籍「ワクチンと伝染病—お母さん、働く人々、医師、保健、医療関係者、教師のために」（新医協東京支部1970年発行）から学ぶ

新医協本部の図書棚の中から、表記の書籍が見つかりました。本書は、「子どもの健康に关心を抱くお母さんたち働く人々、人民の立場で、ワクチンと伝染病の予防の問題をまとめたもの」です。“刊行によせて 新日本医師協会幹事長 久保全雄”では、「有史以来、人類は伝染病とたたかってきた。一中略—流行の際は、子どもの対策として臨時休校という知恵のない策、また、労働者の病欠に対しては、賃金カットという冷酷なしうちをくりかえしている。一中略—政府の伝染病対策をみてみると、地域大衆に対する環境衛生対策としての公共投資はまったく無視され、ワクチン一辺倒である。しかも、そのワクチンも製薬資本の利潤追求にふりまわされている有様である。それ故、政府が伝染病対策をやっていると言つても、それは絵空ごとで、絶滅を期待するわけにはいかない。本書は、これらの諸点を根本的に鋭くえぐっている。絶滅のためには、お互い何をなすべきも説かれています」と記されています。

新型コロナウイルス感染が猛威を振るい、他方、子宮頸がんワクチン問題に取り組んでいる中、諸先輩が「ワクチンと伝染病研究会」を立ち上げ、3年の月日をかけてまとめ上げた本書を今紐解き、その到達点を学び、共有し、今日の活動に反映したいと考えます。

ご案内

第18回新医協保健師の会

2月の保健師部会は11名が参加しました。練馬区の下地保健師さんが、住民と保健師であることの重なりについて、自身の体験から詳しくお話をしました。保健師の感性や、初回相談の大切さなど心に残る報告でした。

5月例会では昨年11月に報告していただいた古野民子さんより、江東区で働いてきた保健師の仕事など、感じたことについてお話を聞いていただきます。

皆様の参加をお待ち申し上げます。

日時 5月15日（金） 18:30 ~

場所 新医協事務所

テーマ 住民に叱られたり、教えられたこと

報告者 古野民子

(城東南部保健相談所 保健師)

参加費無料

第10回新医協HPVワクチン検討会	日時	4月24日（金）18:30~
会場	新医協本部事務所	

新医協東京支部講演会	申込方法	メールやFAX後、振替用紙（通信欄に講演名・参加者名を必ず明記の上）左記にお振込み下さい。
------------	------	---

新春のつどい・講演会「過去の病気？水俣病・カネミ油症」中止について

3月13日（金）に開催予定してお

りました表記の会については、新型コロナウイルス感染症の拡大と対策により中止といたしました。

日本全体で行われています集会の自粛や参加者の交通事情、さらには熊本県からお呼びする藤野先生の勤務病院でも学校の休校などの対策により人員配置の困難、さらには理由です。既にお申込みされたいた方々からの問合せもありました。中止の判断をする前日まで、配布資料の調整をし、3月1日付「東京新聞」にて今講演の案内が掲載されるなかでの急な決定でした。

皆様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願ひいたします。（新医協事務局）

口をめぐるトラブルと向き合う
くよだれ、指しやぶり、
爪かみ、かみつき、

口は“食べる”に代表されるように、外界の取り入れを通して心身の発達に関わるかなめの臓器です。一方で、その口をめぐつておこる様々な“トラブル”に頭を抱えている方も多いと思います。よだれで一日何回も服を替えなければならぬ子、つばが飲み込めない子、指をしゃぶつて仲間と手がつなげない子、人から離れて爪を噛む子、かみついてくるの外に育ちの上で背景を抱えています。口をめぐる様々な課題を発達の観点から理解すると展望が見えてきます。家庭での対応、母子保健事業での支援、保育所幼稚園での保育上の工夫などを、歯科医師で、また前園長でもある先生から話して貰います。そして同じ悩みで集まる参加者の体験を持ち寄って学び合いましょう。

★先着100名様で〆切

日時 5月30日（土）10:30~16:00

会場 北とぴあ

講師 岩倉政城

／尚絅学院大学付属幼稚園前園長／新医

協顧問

参加費 新医協会員3,500円

一般 5,000円